

インターネット検索 & Iron Road 資料整理 2018. 9. 10.  
 PDF 「国生み淡路島の実像-津名丘陵山間地集落群の中心集落 舟木遺跡概要-」

2018. 8. 25. by Mutsu Nakanishi



淡路島北部を南北に走る津名丘陵の上 弥生後期から終末期の山間地集落群の中心 舟木遺跡

- ◎ 淡路島北部 瀬戸内海を見晴らす古代の海人の郷 淡路市野島
- ◎ 畿内に先駆けて鉄器化を取り入れ、鉄器加工や製塩など生産工房群を展開した山間地集落群の中心 舟木遺跡を訪ねる

卑弥呼の時代を解き明かす? 淡路島

弥生後期の大山間地集落群 淡路市舟木遺跡から弥生期の鉄製ヤスが出土  
 海の民や北部九州とのつながりを示す? 2018.3.23. 神戸新聞より

本年1月ご紹介した淡路島の北部津名丘陵 弥生後期の大山間地集落群の中心集落遺跡淡路市舟木遺跡から「かえし」があるなど弥生時代の北部九州の鉄器加工の先端化技術で作られた鉄製のヤスが出土した。

国生み神話があり、国内最大級の弥生の鍛冶工房村五斗長垣内遺跡の出土。そして、時代の大転換を示す多数の初期埋納銅鐮松帆銅鐮の出土している淡路島。弥生時代から古墳時代への大きな転換期 卑弥呼の時代に「淡路島が重要な役割を果たした」との期待がにわかに高まってきた。

国づくりが始まる当時の最重要課題は朝鮮半島の鉄素材の確保とその交易の覇権。

そんな中で、淡路島の北部津名丘陵には、各種生産工房を有し、交易を生業とすると考えられる淡路市「舟木遺跡」を中心とする大山間地集落群の存在が明らかになってきた。

新しい時代を開く集落群として注目を集め、淡路島の海岸部には野島や三原の海人とよばれる瀬戸内海を庭とする海の民がいることもあって、「淡路島の交易ネットワークが卑弥呼の時代の謎を解き明かすのではないか?」との期待の元にわかに脚光を浴びている。

そんな昨今 淡路島の発掘調査に注目が集まる中、3月23日淡路市舟木遺跡で弥生時代の「かえし」のある鉄製ヤスが、出土し、北部九州から持ち込まれたと考えられるとの新聞報道が関西に大きく流れた。



2018.3.23. 神戸新聞 朝刊

記紀神話は国生み神話の最初に淡路島を挙げ、弥生中期から後期にかけての大規模な鍛冶工房跡である「淡路島五斗長垣内遺跡」はじめ、淡路島北部の津名丘陵に展開された舟木遺跡を中心とした鉄器加工や製塩・干イダコなどの生産工房を持つ山間地集落群は 弥生時代から古墳時代への転換を読み解く鍵を握っていると思われる。

その理由としては

淡路島は魚介類や塩という海の幸と山野で捕獲される鳥獣肉を山の幸とし、また、庸として米を納める御食の国。





淡路島北部 瀬戸内海を見晴らす古代の海人の郷 淡路市野島 古代製塩の復元像と野島海人像 淡路市野島大川

『日本書紀』には 航海術に秀でた淡路の海人「御原の海人」・「野島の海人」の活躍の記事 が少なくなく、古代大和と密接な関係を持ちつつ、各地から数々の物品・技術を伝え、淡路島を食の国に仕立て上げた淡路島の海人たちの存在がクローズアップされてきた。

一方、当時の初期大和の力の源泉・大和連合諸国をつなぎ止める最大の関心事は「朝鮮半島の鉄素材の安定確保と流通の支配」であり、畿内の西日本への玄関口 淡路島での最大級の鍛冶工房村の出土は 大和にとって淡路島の重要性をあらためて、浮かび上がらせた。

さらに淡路の海人と直接つながる製塩ほか数々の産物や鉄器加工などの生産工房をもつ山間地大生産工房集落群の出土は 具体的に淡路島が鉄ほか物品の流通を司り、時代先端の役割をはたす重要拠点との淡路島の実像を浮かび上がらせた。。

御食国・国生み神話の島と呼ばれてきた淡路島はもう、神話や物語の世界ではなくその実像は大和初期王権の命運を握る諸物品の流通拠点であったと。

淡路島は国生み伝承の島としてはよく知られていたが、直接 大和王権につながる事象がなく、新しい鉄器文化・国造りに参画する力のある地域とは考えられていなかった淡路島が、一気に脚光を浴びることになった。

記紀が一番最初にあげる「国生み」の話についても 海人たちが守り伝えてきた出生譚ばかりでなく、製鉄の渡来神 天日槍の伝承にも 国生みのルーツとの説もあり、淡路島の地域の重要性が極めて高くなってきた。

今まで、よくわからなかった 弥生後期から古墳時代への日本の国造りの時代が淡路島を介して解き明かされるとの期待が高まっている。

半島と畿内を結ぶ瀬戸内海ルートの交通の要所として重要であり、海人たちが活躍した淡路島 鉄器生産工房跡の存在によって、淡路島が鉄の輸入・加工、配送拠点との役割が 今クローズアップされてきた。また、ヤマト王権は海運を握る海人族と半島の鉄利権を握る天孫族の連合体であったことを意味するとも考えられ、国生み神話において海をかき混ぜる道具が何故「矛」なのかはその象徴かもしれない。

弥生後期国内最大級の五斗長垣内遺跡については数々の検討が加えられ、私も何度となく訪れたことがある。しかし、同じ淡路島の北部の海岸線や津名丘陵に展開する舟木遺跡を中心とした生産工房群を持つ山間地集落群や淡路の島の海人たちの痕跡については、其の重要性を色々教えてもらいながら、残念ながら 現地を訪れる機会がありませんでしたが、この夏 やっとその一端 舟木遺跡を訪れる機会ができました。現地探訪に先立って、ばらばらになっている頭の整理のため、淡路島の国生み神話や古代関連の製鉄関連遺跡について 和鉄の道・Iron Road として集めてきた資料を読み返したり、インターネットから引っ張り出したりして、。自分なりに、現地探訪の一助にレビュー整理したので、参考までに記載添付。

## 海人や国生み神話をめぐるシンポジウム「淡路島古代史の魅力を探る」より

海人や国生み神話をめぐるシンポジウム「淡路島古代史の魅力を探る」が、兵庫県淡路市内で開かれた。

兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、淡路島日本遺産委員会の主催。

松帆銅鐸など発見が相次ぐ淡路島の古代像と交流圏について、文献史学と考古学からのアプローチが試みられた。

### ▼ 古市晃・神戸大准教授

海人が漁労にとどまらず広域に活動していた可能性を伝承から探った。

#### ■海人の南北往来

日本書紀には、允恭（いんぎょう）天皇の淡路島での猟の際、島の神の託宣に従い、阿波国長邑（ながむら）（徳島県那賀郡）の海人男狭磯（おさし）が真珠を取ってきた伝承がある。

大嘗祭（だいじょうさい）で那賀から献上された海産物は、淡路の容器に収められたとされ、両者の深い関係がうかがえるという。

また、美囊郡志深里（兵庫県三木市志染町）の地名起源として、播磨国風土記が記す、阿波国和那散（わなさ）（那佐湾）のシジミ伝承に注目。志深には王権直轄の屯倉（みやけ）があり、「淡路を経由した阿波の海人の王権に対する奉仕活動の一端が残った」可能性を指摘した。

さらに、国造本紀（こくぞうほんぎ）で 隠岐国造と阿波の長（なが）国造の先祖とされる観松彦色止命（みまつひこいろとのみこと）、播磨国風土記に登場する弥麻都比古（みまつひこ）命、出雲国風土記に記される阿波枳間委奈佐比古（あわきへわなさひこ）命などと海人集団の関連性を分析し、「淡路を中心に海人が太平洋側と日本海側を行き来していた」と推定。

また、天皇への反乱の拠点として、たびたび登場する淡路の軍事的重要性をクローズアップした。

#### ■製塩遺跡と王権

### ▼ 伊藤宏幸・淡路市教育委員会文化財活用等担当部長

海人の重要な生業だったと考えられる製塩遺跡と王権の関わりを考察した。

島内の製塩遺跡は約30カ所で、引野遺跡（兵庫県淡路市）では製塩土器が脚台式から丸底形へ、貴船神社遺跡（同）では石敷炉の使用へと変化。

熱効率を上げ、大量生産体制に短期間で移行したことが分かるという。

製塩土器やイイダコつぼは、弥生時代後期の鉄器生産工房跡のある山間地の舟木遺跡（同）からも出土。

「鉄器文化の伝播には、海の民の深い関わりが背景にあったのでは」と推測した。

南部の三原平野でも、5世紀後半の木戸原遺跡（南あわじ市）で鉄器が生産された可能性に言及。

石製祭祀遺物や初期須恵器、韓式系土器が出土する同遺跡や雨流遺跡は「王権や朝鮮半島とのつながりが見てとれる」とし、弥生時代の海の民から古墳時代の海人への流れを描いた。

#### ■神話の広がり

### ▼ 坂江渉・ひょうご歴史研究室研究コーディネーター

海人族の伝承と国生み神話 記紀の国生み神話の背景を、文献史学の立場から読み解いた

国生み神話については、宮廷に仕える海人を介し、淡路の島造り神話が取り込まれており、オノコロ島の誕生譚は製塩作業が発想源とする見解が有力だった。だが、播磨国風土記のアメノヒボコ伝承にも「剣を以（もつ）て海水を攪（か）きて宿る」という同様のモチーフがみられ、海上に形成される砂州状の島への信仰が、神話の原形としてあったと想定。

オノコロ島で「天（あめ）の御柱（みはしら）」を立てる“ハシタテ”伝承も、漕標（みおつくし）のような柱にイザナギ・イザナミを招く神事があり、砂州に集まった海人一族により「航海の安全や豊漁への感謝とうたげの後、歌垣の開催へつながったのでは」との解釈を示した。

イザナギ・イザナミ信仰に関わる神社は若狭や阿波にもあり、丹後国風土記にも天橋立の創造伝承として登場することに注目。丹後一宮・籠（この）神社の社家である海部直（あまへのあたえ）氏が「淡路の海人から強い影響を受けていた」とし、神話の広がりについて論を展開した。

## 【参考2】 『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～

淡路市教育委員会 社会教育課長 伊藤宏幸

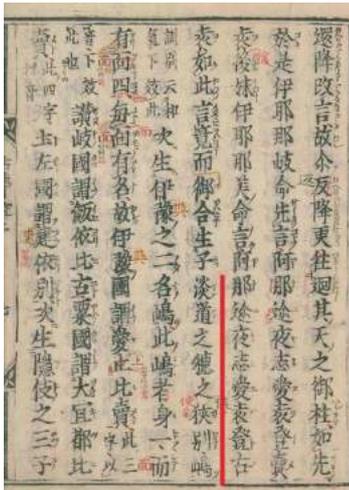
わが国最古の歴史書『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」。この壮大な天地創造の神話の中で最初に誕生する“特別な島”が淡路島である。

その背景には、新たな時代の幕開けを告げる金属器文化をもたらし、後に塩づくりや巧みな航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた“海人”と呼ばれる海の民の存在があった。

畿内の前面に浮かぶ瀬戸内最大の島は、古代国家形成期の中枢を支えた“海人の歴史を今に伝える島である”。



海人の塩づくりのイメージ



『淡路之穂之狭別之嶋』として、日本列島の中で最初に生まれた島が淡路島であることを記した『古事記』イザナギ・イザナミの二柱の神様が天の沼矛で下界をかき回し、塩の雫が固まって「おのころ島」ができる描写は、海人が生業とした塩づくりの過程で製塩土器の中の海水を攪拌し、結晶塩ができる様子を重ね合わせられる。また、天の沼矛でかき回すことによって下界が渦巻く描写は、海人が活躍した鳴門海峡の巨大な渦潮と重なる。

## 【参考3】 貴船神社遺跡（緑の道しるべ大川公園） & 野島の海人

貴船神社遺跡は 野島の浦に位置する古墳時代から奈良時代にかけての製塩遺跡



近年発掘された製塩遺跡で、弥生時代から古代にかけて海人族が製塩を行っていたとされ、熱効率の向上を図った石敷炉が兵庫県では初めて発見された貴重な遺跡。

鉄製の釣り針やタコ壺などの海との繋がりを示す遺物も出土しており、

万葉集に「朝凧に 楫の音聞こゆ 御食つ国 野島の海人の 船にしあるらし」と詠われた「野島の海人」はこの地で製塩を行っていたと考えられています。

また、朝鮮半島から運ばれたとされる新羅式の土器も出土しており、野島の海人と朝鮮半島との関係の深さも想像することができます。現在は、緑の道しるべ大川公園として整備されており、製塩作業をする海人のモニュメントや解説板が建てられています。

〈 貴船神社遺跡 野島の浦に位置する古墳時代から奈良時代にかけての製塩遺跡 〉

熱効率の良い石敷炉（いしじきろ）が発見されており、大量生産した塩は王権にも供されたと考えられます。日本書紀に登場する「野嶋の海人（あま）」の活動拠点とされ、現在は海人が生業とした土器・製塩の様子をモニュメントで見ることができます。



◎ 野島の海人像 淡路島の西岸北部 野島

古代遺跡の貴船神社遺跡がある緑の道しるべ・大川公園に立っている野島の海人像

この像は、松帆の浦を詠んだ長歌「淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ」海人の娘子をイメージして造られたといい、台座には山部赤人の歌が書かれている。

朝名寸二 楫音所聞 三食津國

野嶋乃海人乃 船二四有良信

朝なぎに 楫かぢの音聞こゆ 御食みけつ国

野島の海人あまの 舟にしあるらし

山部赤人 巻6-934



#### 【参考4】 宮本常一 海に生きる人々 より

島国淡路は魚介類や塩という海の幸と山野で捕獲される鳥獣肉を山の幸とし、また、庸として米を納める御食つ国であった。『日本書紀』には淡路の海人「御原の海人」と「野島の海人」の活躍の記事が少なくない。

#### 淡路国 海人族

淡路国は海人（あま）を束ね、内膳司の地位を争った阿曇氏が支配していた地域であった。

南あわじ市 阿那賀伊毘地区は 米づくりや塩づくり、漁業、航海術を伝えた「古代 海人族」の住む郷として知られている。

特に伊毘の海人族は、日本一潮の流れの速い鳴門海峡で生活していたため航海術にすぐれていたといわれる。淡路島には、明石海峡周辺（淡路島北部）を支配していた野島海人族 鳴門海峡周辺（淡路島南部）を支配していた御原海人族がいました。

#### 【参考5】 日本書紀などに記された淡路島の海人

◆ 履中元年（399）4月、同5年9月「日本書紀」 河内飼部（かわちのかいべ）の鯨面をやめさせた履中5年（404）9月18日「日本書紀」 淡路島に狩猟。この日、河内の飼部（うまかい）等が天皇に従って、轡につける手綱を執った。

（淡路島に狩りしたとき、河内飼部が馬の口をとってお供した。

飼部の入れ墨が消えないまま出かけたところ、淡路島の伊弉諾神の神宮が血がくさくて困ると言ったのでこの後は入れ墨をしなくなった）とあり、入れ墨の風習は5世紀までであったようである。

上田正昭氏によると、河内地方の平野にあった喜連（きれ）近く、往古には 讃良郡と呼ばれた地域に河内飼部 という氏族があり、持統天皇の養育にたづさわったという。

#### 海人族の足跡

古事記・日本書紀には、15代応神天皇・16代仁徳天皇・17代履中天皇・18代反正天皇・19代允恭天皇の時代（4世紀終わりから5世紀半ば）に淡路の記述が多く見られる。

中でも 海を生業の場にした人々「野島の海人」「御原の海人」のことが記されており、淡路と天皇家との深い関わりがうかがえる。淡路市野島平林の貴船神社遺跡は 弥生時代末から古墳時代の製塩遺跡。兵庫県で初めて「石敷き製塩炉」が発見された。

淡路の言葉が地理的に隔たっている摂津・和泉・河内と共通のものがある理由は上代から交易・文化両方の交渉があり、野島海人（のじまのあま）・三原海人（みはらのあま）が浪速から大和にかけて活躍した事が挙げられる。

また、紀伊とは漁業者が出買いに赴いて交易を開拓していたという繋がりがある。

また、阿波とは江戸時代淡路島が徳島藩の統治下だった関係がある。

畿内に先駆けて鉄器化を取り入れ、鍛冶や製塩などの生産工房を持つ山間地集落群の中心

#### 【参考6】 淡路島日本遺産 弥生時代後期 淡路島北部津名丘陵の山間地集落群の中心 舟木遺跡

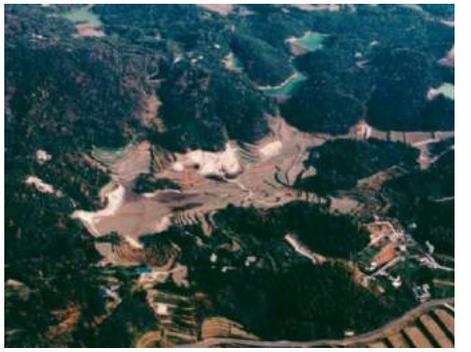




淡路島北部 弥生後期の山間地集落遺跡群の中心集落「淡路市 舟木遺跡」  
 近くの五斗長垣内遺跡を上回る新たな「弥生の鉄器拠点とみられる国内最大級の鍛冶工房跡」が出土  
 2017. 1. 26. 神戸新聞他の朝刊より

◆舟木遺跡 神戸っ子 掲載記事  
 2016年3月号より

邪馬台国出現前夜の弥生時代を知る手がかり  
 淡路市の丘陵部に点在する約200カ所の弥生時代後期の遺跡群の一つ。  
 標高約150メートルに位置し、遺跡の範囲は約40ヘクタールに及ぶ。  
 平成初期に0.4ヘクタールの発掘調査が行われた際、1世紀～2世紀頃の弥生時代後期の竪穴住居跡や、多数の土器などが出土した。



ため池や田畑を中心として広がる舟木遺跡(平成3年撮影)

集落群の中心的な役割を占めた可能性が指摘されており、 邪馬台国出現直前の弥生社会を解明する上で重要な鍵とされている。

近年、淡路島では、五斗長垣内遺跡の弥生鉄器や松帆銅鐸のように、淡路の神話を裏付けるような重要な発見が相次いでいることから、淡路市教育委員会は「淡路市国生み研究プロジェクト」と題して、2015年より2年計画で舟木遺跡の発掘調査を行っている。

土器などの分布調査を経て、2016年度からは五斗長垣内遺跡などとの出土遺物や遺構の比較検討をはじめ、本格的な発掘調査が行われる予定。この取り組みによって、弥生社会における淡路島の歴史的役割や国生み神話との関係が、深く掘り下げられることになるだろう。



平成3年の調査の際に発見された竪穴式住居の跡



破棄された土器群が発見されている



舟木遺跡中央部にある巨石祭祀跡



## ◆ 淡路島の大規模鉄器生産基地をうかがわせる「舟木遺跡」

『神戸・兵庫の郷土史』Web研究館 <http://kdskenkyu.saloon.jp/tale7Ofun.htm>

鉄器生産工房を持つ遺跡「五斗長垣内遺跡」から東北に約6kmの位置に、昭和41年に小学生の土器発見により、同じく弥生遺跡「舟木遺跡」の存在が明らかになっていました。

海から約2km、標高150mの内陸丘陵地で、南北約800m、東西500mの推定40万㎡の広大な遺跡です。平成2年から圃場整備事業などの開発工事に伴う発掘調査で、大型の竪穴建物跡、中国鏡の破片や器台、製塩土器、イダゴ壺などが出土していました。淡路島における古代の歴史文化を明らかにしようと始まった「淡路市国生み研究プロジェクト事業」として、平成28年に舟木遺跡に本格的な発掘調査が実施されました。

遺跡発見の端緒となった土器が出現した尾根（約1ha）の7カ所（総調査面積128㎡）に設定した幅2mのトレンチ（調査溝から、うち4カ所から竪穴建物跡、57点にも及ぶ鉄器（小さな針状の工具類や鍛冶に関わるもの）、その他台石、叩石、磨石、砥石などの石器が42点出土しました。

発掘された大型の竪穴建築物跡4棟のうち3棟は直径10m以上の円形、しかもそのうち1棟は赤く焼けた炉跡4基あって、炉の近くから鉄片が発見され、鍛冶用と考えられる砥石・敲石など石製工具も発見され、中央部が広く作業に適した工房跡（鉄器製作を行った鍛冶工房）と思われる。また、4棟全てから鉄器製作用とみられる多数の石器類、鉄器の類がでました。

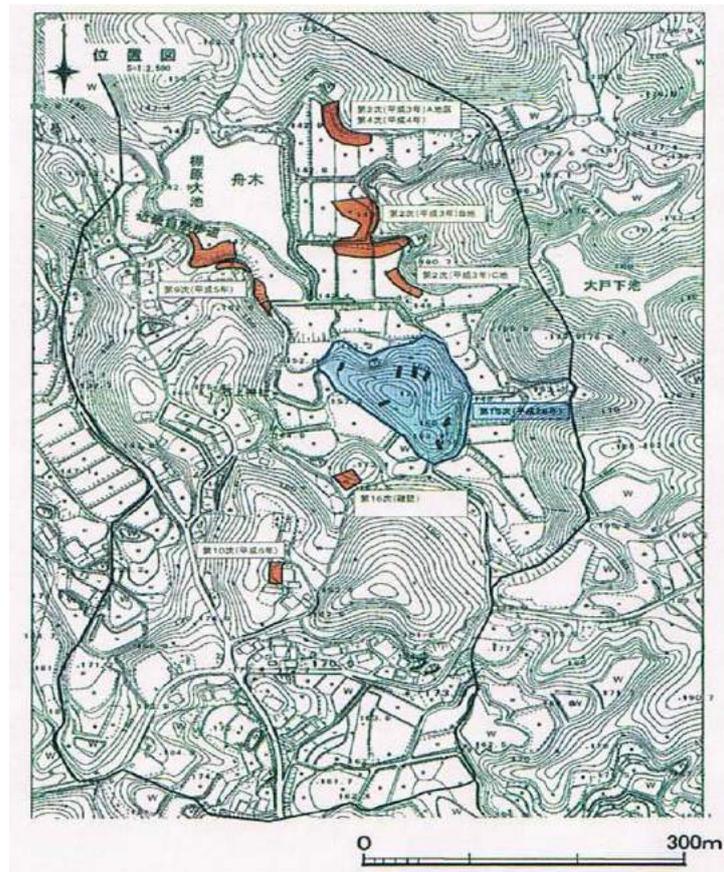
「舟木遺跡」は、武器類の鉄器が多く出た近隣の「五斗長垣内遺跡」とほぼ同時期に存在していましたが、現在のところ武器類以外の生活用？鉄器が中心で、「五斗長垣内遺跡」よりも長く鉄器生産を続けていたと考えられています。

今回の調査は、広大な遺跡エリアの中心部に位置する狭い尾根に、限定された地点をトレンチするという方式で、全面発掘ではありませんでしたが、これだけ多くの発見がありました。

また、近隣地区に存在する大きな磐座を祀る（巨石を祀るのは弥生時代・古代も）石上（いわがみ）神社周辺からも大型の器台形土器が発見されるなど、丘陵地全体が一大鉄器生産基地だったことがうかがえます。引き続き、「舟木遺跡」や「五斗長垣内遺跡」の発掘調査・研究成果が期待されます。



(舟木遺跡今回発掘調査エリアを西側から望む)  
舟木遺跡と調査地（中央）



地図は『舟木遺跡発掘調査成果報告会資料』より引用  
(淡路市教育委員会)



舟木遺跡から発掘された土器類



遺跡エリアに古くから祀られている  
石上神社の磐座

## 淡路市国生みプロジェクト成果発表

### 平成28年度 舟木遺跡の発掘発掘調査成果について

淡路市教育委員会 2017. 1.24.

#### 平成28年度 舟木遺跡の発掘調査成果について

～ 淡路市国生み研究プロジェクト成果発表 ～

#### 1. 要 旨

平成28年4月に認定を受けた日本遺産ストーリーのタイトルである『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」。その背景には古代国家形成期に重要な役割を果たした淡路島の歴史がありました。平成27年度に着手した“淡路市国生み研究プロジェクト”は、古代国家形成の原点ともいえる弥生時代における島の歴史を、北淡路の丘陵部に急増する弥生時代後期の遺跡群の調査をとおして究明しようとするものです。その中心となるのが、舟木遺跡の重点調査です。

平成27年度、中国鏡の発見につながった出土遺物の再整理に続き、本年度は遺跡発見の契機となった尾根を対象として発掘調査を行いました。その結果、限られた調査面積であったにも関わらず、五斗長垣内遺跡に続き、多数の鉄器が出土したほか、大型の工房建物の存在が明らかになるなど、弥生時代の鉄器文化を解明する上で極めて重要な遺跡である可能性が見えてきました。今回、その成果を発表いたします。

#### 2. 遺跡名

舟木遺跡（ふなきいせき）

#### 3. 時 代

弥生時代後期 ～ 終末期

#### 4. 調査主体

淡路市教育委員会

#### 5. 調査内容

- ・調査面積：128㎡（2×10m5箇所 2×7m2箇所）
- ・調査期間：平成28年10月11日～平成29年1月31日（予定）

#### 6. 調査結果

##### (1) 検出遺構

- ・堅穴建物跡 4棟（後期後半～終末期、いずれも建替えあり）
  - 円形 3棟（No.6、7、9トレンチ）
  - 隅丸方形 1棟（No.2トレンチ）
- ・溝状遺構：1条（弥生時代終末期）

##### (2) 出土遺物

- ・鉄製品 57点
- ・石製工具 42点（台石、叩石、磨石、砥石）
- ・弥生土器 31箱 弥生時代後期後半～終末期  
（壺、甕、鉢、高坏、器台、製塩土器、イイダコ壺、小型土器）

#### 7. 評 価

今回の発掘調査では、昭和41年に淡路考古学研究会顧問である岡本稔氏が遺跡を発見した丘陵を対象として、トレンチと呼ばれる幅2mの溝7本を発掘しました。長さ10mのトレンチが5本、7mが2本の合計128㎡というごく狭小な調査面積であったにもかかわらず、堅穴建物跡4棟を検出し、多数の鉄器が出土するという大きな成果がありました。これは、舟木遺跡の通常ならざる姿を物語る成果であるともいえます。その成果についての要点は、以下のとおりです。

- ① 検出した建物跡は、直径が10mを超える大規模な円形の建物（No.6・7・9）や特殊な壁際土坑を有する隅丸方形の建物（No.2）など、通常の住居とは異なる機能を持つ建物と想定できます。いずれの建物跡からも鉄器が出土する状況もそれを裏付けるものといえます。
- ② 出土した鉄器の総数は57点を数え、今回の調査面積が狭小であることを考えれば、その数は大規模な鉄器生産集落である五斗長垣内遺跡をしのぐ可能性があります。
- ③ 出土した鉄製品は、鉄器生産（鍛冶）に関連するものと工具類とに分けることができます。後者には針状鉄器など、小型の工具類が多く、検出した建物跡はそれらを使用した何らかの生産工房であることも予想できます。これらのことから、今回の調査範囲には、鉄器生産工房とその他の手工業生産工房からなる大規模な工房群が存在する可能性も想定できます。
- ④ 出土した土器からは、五斗長垣内遺跡が姿を消した以降も鉄器生産を行っていたことが確認となりました。それを裏付けることとなったNo.9トレンチの溝から出土した多数の鉄器と大量の土器群には祭祀的な様相も見ることができ、背後の丘陵頂上部に工房群と深く関係する重要な遺構が発見される可能性もあります。
- ⑤ 今回の調査範囲で検出した工房群のほかにも、谷部を取り巻く周囲の尾根上には当時の土地開発の痕跡や数多くの建物群が存在することが想定でき、それらが有機的な関係を持って広大な範囲に広がる、弥生時代の淡路島では他に例を見ない構造を有する遺跡であることが見え始めました。

## 8. まとめ

今回の舟木遺跡の発掘調査成果は、これまでの五斗長垣内遺跡の調査成果や今後も発見される可能性がある遺跡の存在などを考え合わせれば、弥生時代後期に急増する山間地集落群を有する淡路島北部が鉄器の製作や保有で近畿地方でも極めて重要な地域である可能性を想起させるものであります。今回の成果は、舟木遺跡はその中でも中心的な位置を占める可能性を示しています。

今回の調査は、ごく限られた範囲で成果であり、実態解明には今後の調査の積み重ねが必要ですが、今後も兵庫県教育委員会や兵庫県立考古博物館などとも連携を図りながら、舟木遺跡の実態解明と淡路島の弥生時代の歴史究明に努めていく予定です。

平成28年度舟木遺跡発掘調査成果一覧表

地区名	遺構				遺物											
	種別	数	形態	備考	鉄器					石器						
					合計	針状	棒状	板状	その他	合計	台石	叩石	砥石	磨石	その他	
No.1	—	—	—	—	—						15	2	5	2	1	5
No.2	竪穴建物跡	1棟	隅丸方形 一辺約4.5m	壁際土坑 建替えあり	23	3	1		19	10			6	3	1	
No.5	—	—	—	—	—					1					1	
No.6	竪穴建物跡	1棟	円形 直径約9.6m	建替えあり	1				1	1					1	
No.7	竪穴建物跡	1棟	円形 炬跡4基	建替えあり	4			4		7		5			2	
No.9	竪穴建物跡	1棟	円形		29	7	1	1	20	8		5	1	1	1	
	溝状遺構	1条														
No.10	—	—	—	—	—					—						
合計					57	10	2	5	40	42	2	21	6	7	6	

## 学識者コメント

### 舟木遺跡コメント

- ① 弥生時代後期後半から末（庄内期）の大型の竪穴建物跡4棟を検出し、多数の鉄製品が出土している。今回の調査面積が狭小であることを考えれば、五斗長垣内遺跡をしのぐ鉄製品を有する可能性がある。
- ② 出土した鉄製品には鉄器生産（鍛冶）に関連するものと工具類とに分けられる。後者には針状鉄器など、小型の工具類が多く、検出した建物跡にはそれらを使用した何らかの生産工房である可能性が高い。今回の調査範囲には、鉄器生産工房とその他の手工業生産工房からなる大規模な工房群が存在する可能性がある。
- ③ 今回の調査範囲で検出した工房群のほかにも、谷部を取り巻く尾根上には当時の土地開発の痕跡や数多くの建物群が存在することを想定でき、それらが有機的な関係を持って
- ④ No.9 トレンチで検出した一括出土の土器群は、人工的な掘削でできた法面の裾に丁寧に置かれたかのようにあり、投棄されたというものではない。その背後の尾根頂上部に展開する平場には工房群を見下ろす重要な遺構の存在を想定させる。
- ⑤ 島にありながら海から隔絶された内陸に位置するこの集落遺跡は、立地、構造ともに特異であり、海を見下ろす五斗長垣内遺跡とは全く異なる性格をもった遺跡であったと考えられる。

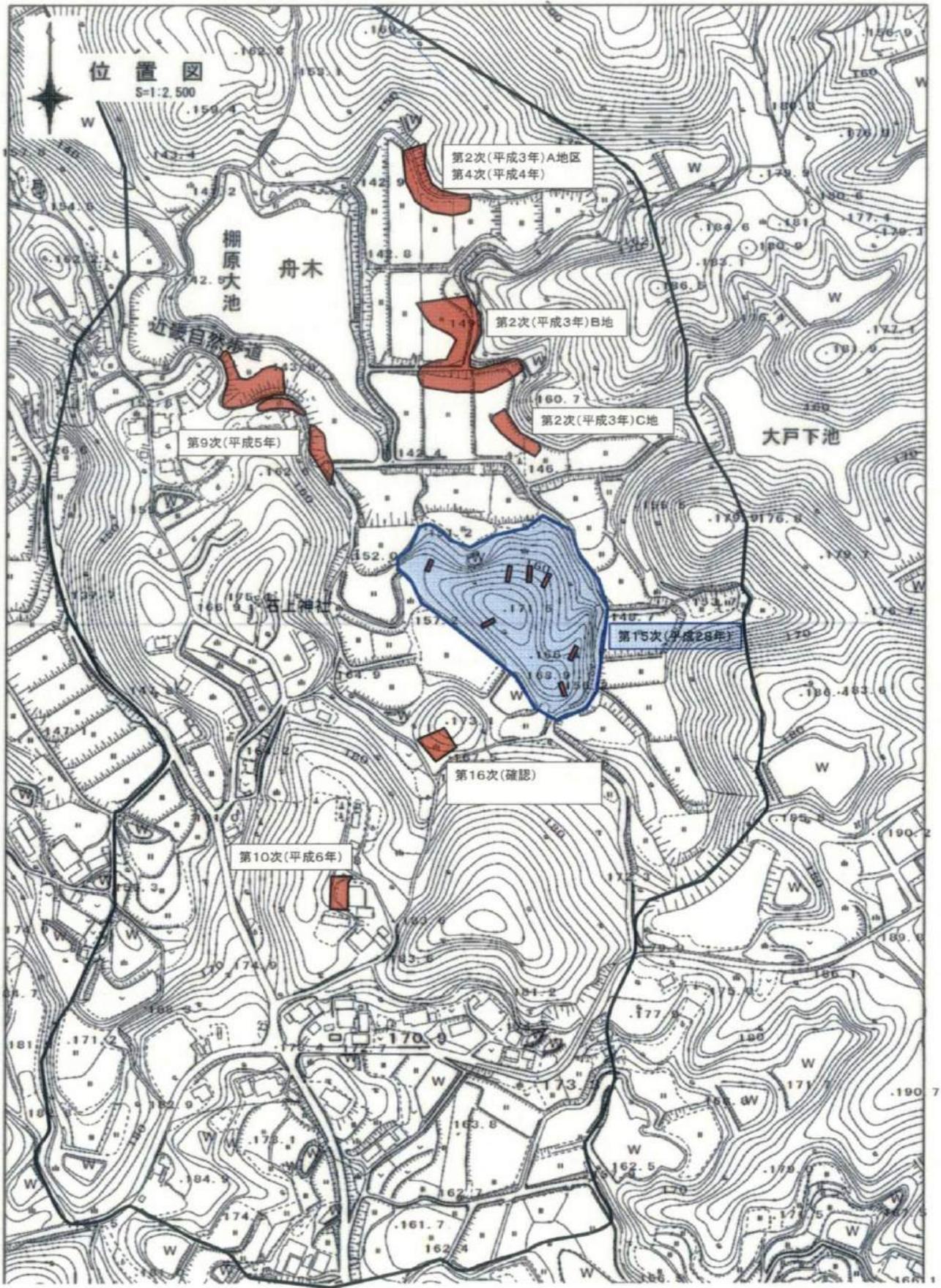
愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長  
村上恭通

### 舟木遺跡コメント

- トレンチ調査の確認結果としては、面積に比し効果的な最大限のよい調査成果だと考える。鉄器に特化した工房群としては、竪穴の形態・大きさ、付属施設の面で蓋然性の高いものであり、淡路島のみならず、近畿地方でも邪馬台国活動期を含めて最大クラスの遺跡とみられる。
- 舟木遺跡群はこの時期では島内最大の集住性があることが事実といえ、群とみなすことによって、立地や生産基盤を異にする大和・河内・摂津の巨大遺跡群に匹敵する歴史的評価を与えることが可能となる。当該期では近畿屈指の鉄工房遺跡群であり、北淡路が近畿中央部の集落遺跡とも連動する中、鉄器の製作や保有で有力視されることが従前のこの10年の成果を踏まえて立証された。
- 中国鏡の早期保有などこの遺跡が周囲の広がり全体を通して、金属器文化の中樞を担い始めたようすがはっきりしてきた。今後の調査に大変期待が寄せられる。また、その中樞には鉢巻的な断続的な環壕もあるようで、大量の祭祀土器などが出土している。丘陵の上部分には金属器工房、鉄器工房とも深く関わる政治的施設や祭祀棟などが発見される可能性も高い。
- 銅鐸のマツリに始まった淡路の先駆的な社会動向が南部から北部へと躍動的に変化していく状況も把握され、ヤマトの王権がどの段階からこの島に関与をみせ始めたかについて、考えるべき新たな課題が噴出してきた。
- 淡路島北部は近畿中心部に向けての弥生後期の鉄器導入に中継地として大きな役割を果たしてきたと述べてきたが、このたびの調査成果はさらに中継拠点としての地域特性を複数の遺跡が持続的に担っていることを明らかにした点で画期的である。遺跡全体の性格が今後の調査により一段と高まる可能性大である。

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員  
森岡秀人



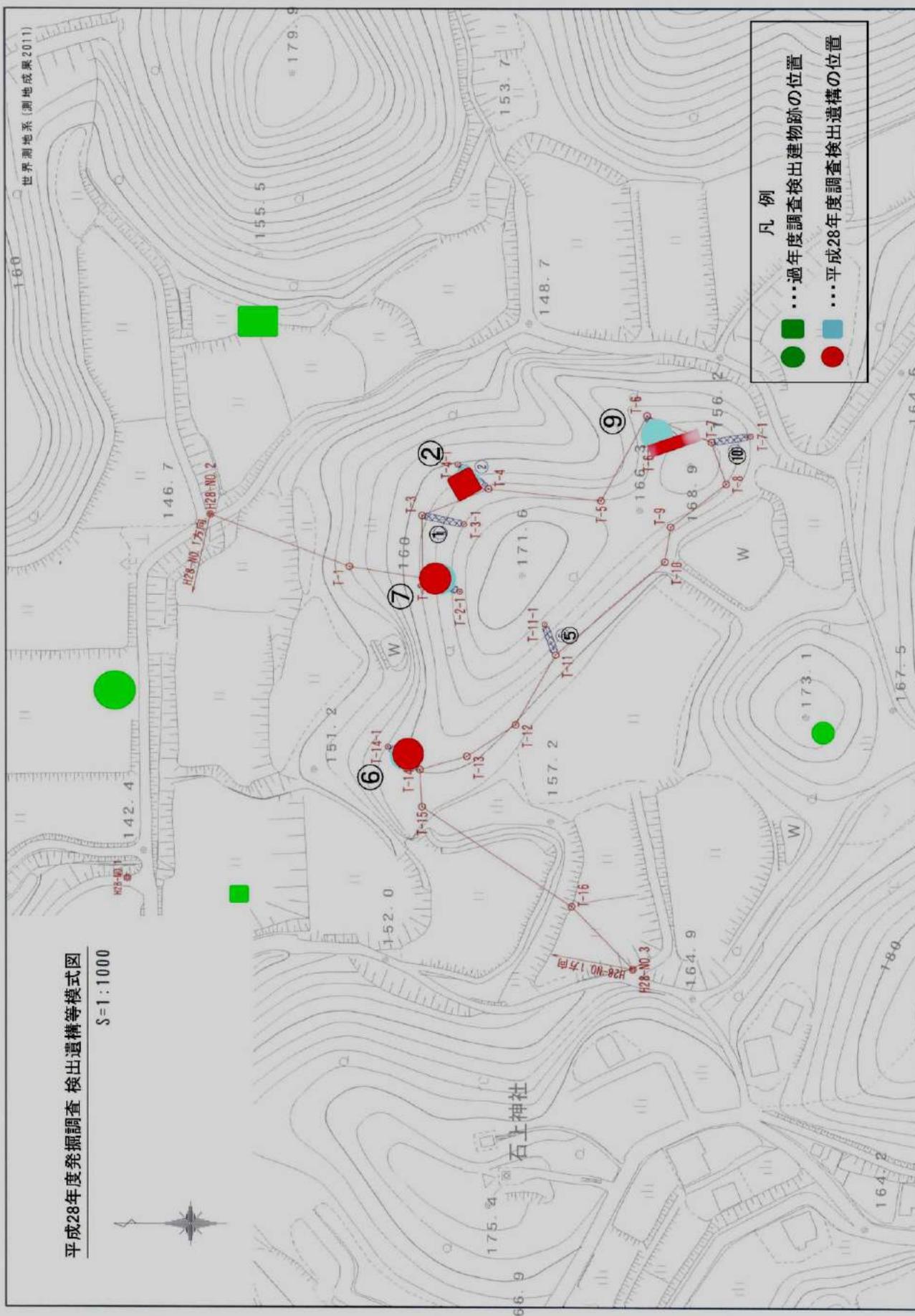


世界測地系(測地成果2011)

平成28年度発掘調査トレンチ配置図

S=1:1000





世界測地系(測地成果2011)

平成28年度発掘調査 検出遺構等模式図  
 S=1:1000

- 凡例
- 過去年度調査検出建物跡の位置
  - 平成28年度調査検出遺構の位置

石上神社





平成 28 年度発掘調査エリア航空写真



平成 28 年度舟木遺跡出土鉄器



平成 28 年度舟木遺跡出土鉄器

武器類の鉄器が多く出た近隣の「五斗長垣内遺跡」とほぼ同時期に存在していましたが、現在のところ出土鉄器は武器類以外の生活用？鉄器が中心。「五斗長垣内遺跡」よりも長く鉄器生産を続けていたと考えられています。



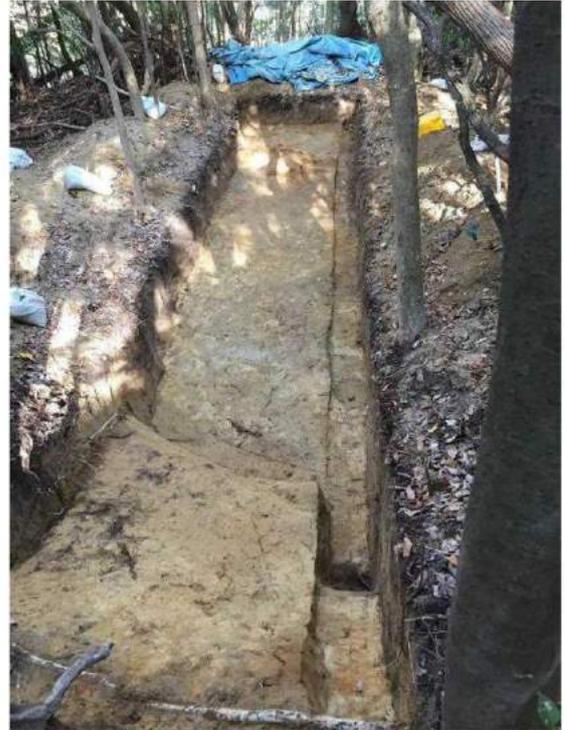
No. 2 トレンチ全景



No. 2 トレンチ壁際土坑



No.6 トレンチ



No.7 トレンチ



No.7 トレンチ焼土面 (炉跡)



No.9



No.9 トレンチ



No.9 トレンチ土器出土状況

平成 29 年度 淡路市国生みプロジェクト  
舟木遺跡発掘調査成果報告会  
淡路市教育委員会 2018. 3.15.



2018.3.23. 神戸新聞 朝刊

神戸新聞 Next 2018. 3.23. 記事 書き写し 弥生期の鉄製ヤス出土 淡路で近畿発

兵庫県淡路市舟木にある弥生時代の山間地集落遺跡「舟木遺跡」の発掘調査で、鉄製のヤスが見つかり、同市教育委員会が22日、発表した。弥生期の鉄製ヤスの出土は山陰地方や九州北部で例があるが、近畿では初めてという。標高約150メートルの山上にある同遺跡から漁具の鉄器が見つかったことで、同市教委は鉄器流通の背景に、海を往来しながら生活していた「海の民」のネットワークがあったことを示す貴重な資料とみている。出土した鉄製ヤスは長さ16・5センチ、幅は最大1・4センチ。全体が錆で覆われていたが、エックス線写真で分析した結果、先端から約1・5センチ下方に「かえし」が見られた。ヤスや釣り針にかえしをつくるには高度な技術が必要といい、鉄器製造が盛んだ九州などから持ち込まれた可能性がある。

また、2016年度調査の出土品から、鉄製の釣り針も確認された。弥生期の釣り針の出土は、県内では会下山遺跡（芦屋市）に次いで2例目という。

弥生期の鉄製ヤスや釣り針は、山陰や九州北部で出土する例が多い。愛媛大東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「山陰は九州から鉄製漁具を受け入れ、漁民が鉄器の交易を促進した」と分析。今回の発見で、漁具が日本海側だけでなく「瀬戸内側を伝わって来た可能性もある」と指摘する。

今回の調査で淡路市教委は、3次元レーザーを使って上空から同遺跡の測量も実施。地表面の起伏を詳細に分析した結果、遺跡の範囲が従来より北に約300メートルほど広がる可能性があることも分かった。

調査成果の報告や出土遺物の展示は25日午後1時半から、同市小倉の北淡震災記念公園セミナーハウスである。申し込み不要。同公園TEL0799・82・3400



出土したヤス エックス線で撮影した画像には「かえし」があることが分かる（淡路市教委提供）。

# 舟木遺跡発掘調査成果報告会資料

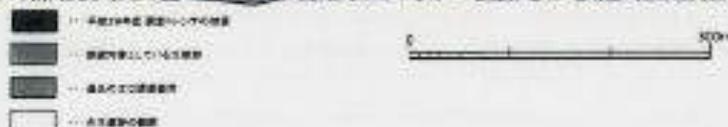
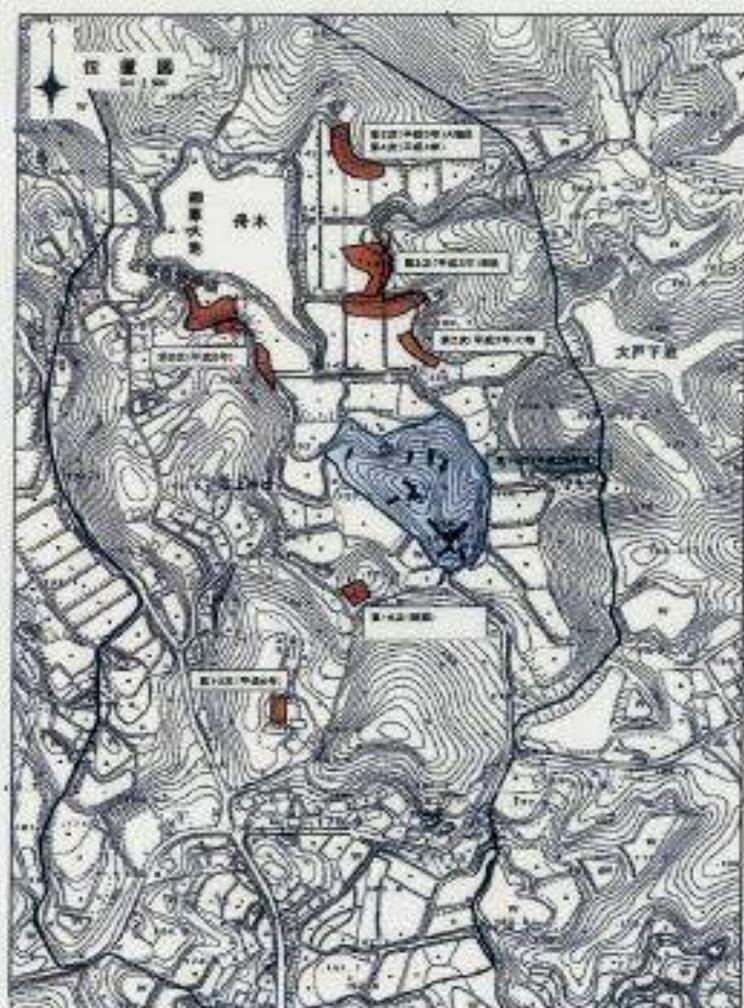
淡路市教育委員会 2018. 03. 25

## 1. はじめに

近年、淡路島では五斗長堀内遺跡や松帆銅鐸など、弥生時代に関する重要な発見が相次いでいます。平成 27 年度に着手した“淡路市国生み研究プロジェクト事業”は、淡路島北部の丘陵上に急増する弥生時代後期の遺跡群の調査をとおして、淡路島の弥生社会を究明しようとするものです。その中心となるのが舟木遺跡の重点調査です。

平成 27 年度の中国鏡の発見につづき、平成 28 年度には鉄器生産を行った重要な遺跡である事が明らかとなりました。本年度の調査では、航空レーザー測量を用いた三次元立体地図を作成し、遺跡の全体像を解明に取り組みました。また、昨年度に引き続き実施した丘陵部の発掘調査では、近畿地方では初めてとなる鉄製ヤスや県下 2 例目の鉄製釣針など、弥生時代としては希少な漁具の発見があり、舟木遺跡の実態解明に貴重な資料を付け加えることができました。

## 2. 遺跡の位置と調査地



### 3. 航空レーザー測量による三次元立体地図作成

樹木が生い茂る山林などでも、地表面の起伏を詳細に表現することができる航空レーザーを用いた地形測量とそのデータをもとに地形を立体的に観察できる三次元立体地図を作成しました。

その結果、舟木遺跡の中心から周辺部にかけて平坦な地形が多数あることを確認しました。そのうち、現在調査対象としている丘陵部に確認できる平坦地は、昨年度実施した調査によって弥生時代に竪穴建物を建てるために造成された地形の痕跡であったことが確認されました。

三次元立体地図を詳細に観察すれば、周辺部にも同じような平坦地形が各所に存在していることが確認でき、遺跡の残りの良さを知ることができます。また、その範囲は南北に伸びる急峻な尾根に挟まれた幅約400～500mの範囲に分布しており、現在遺跡の範囲として把握している北限よりもさらに北に広がる可能性を読み取ることができ、その先は播磨灘を臨む海岸部にまで続くことも推測できます。

このように、三次元立体地図は、舟木遺跡の全体像を知る上において重要な視点を与えてくれるものであり、今後の調査においても重要な手がかりとして生かすことができる成果といえます。

(右図の白線が現在の遺跡の範囲)



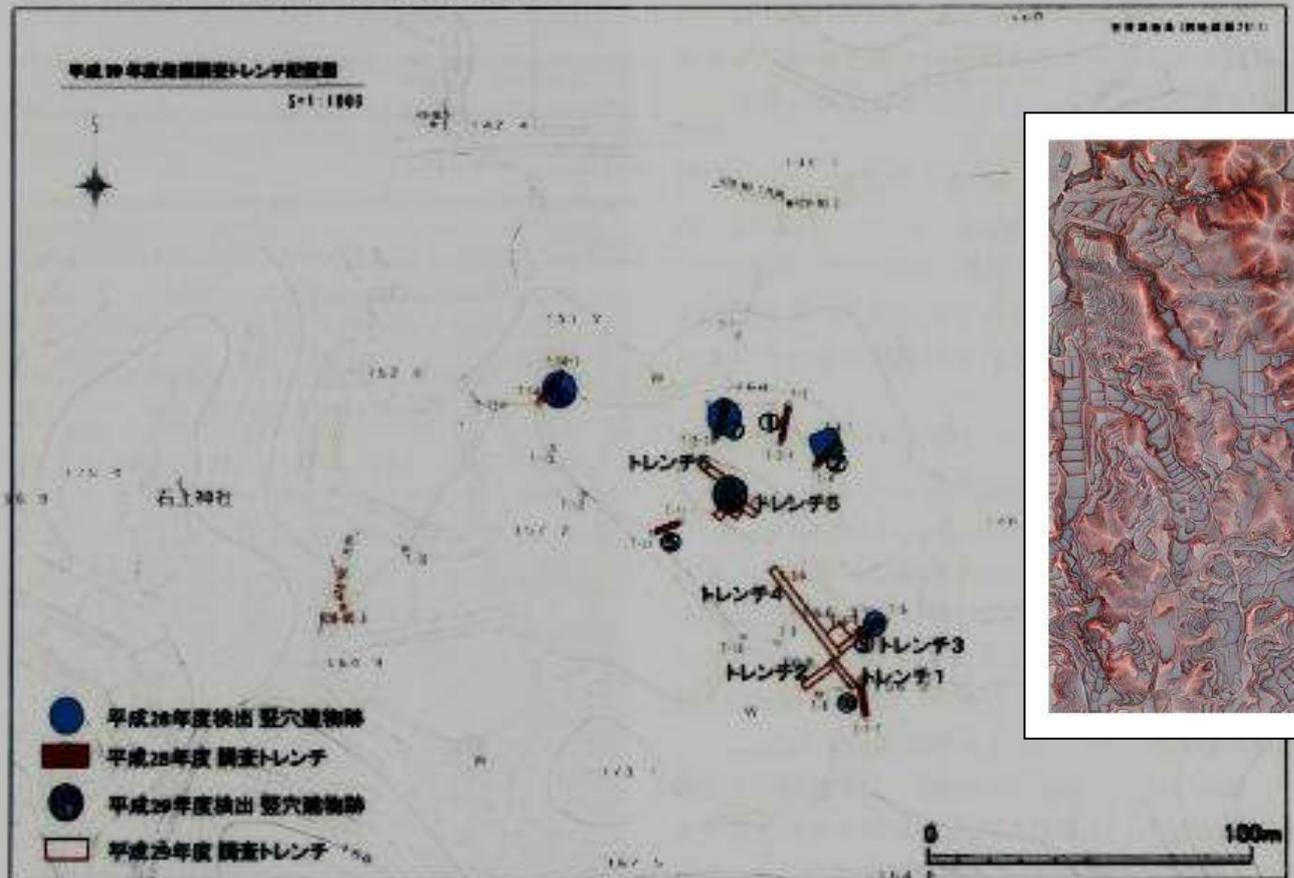
三次元立体地図

### 4. 発掘調査の概要

平成28・29年度に発掘調査を行った丘陵部は、尾根中央の鞍部を境として、鍛冶工房建物を主体とする北尾根エリアと遺構の希薄な平坦面を中心とする南尾根エリアに分かれ、それぞれが役割の異なる場所として利用されていた可能性の高いことがわかってきました。北尾根エリアでは、前年度の調査で発見した鍛冶工房を含む3棟の建物を見下ろす尾根頂上部で大型の竪穴建物跡1棟を発見しました。一方、南尾根エリアでは、遺構や遺物が希薄な頂上の平坦部を取り巻くように、3方向の斜面で大量の土器や鉄器が発見されています。完形品を含む大量の土器群は、尾根斜面裾で使用したものをそのまま投棄した可能性があり、北尾根の工房空間に対して非日常的な空間利用の可能性をうかがわせます。いずれも、弥生時代後期後半から終末期(2世紀後半～3世紀前葉)にかけての遺構・遺物です。

また、本年度も104点の鉄器が出土しました。一緒に出土した土器から、弥生時代後期後半から終末期にかけてのものと考えられます。その中に、鉄製ヤスがあります。弥生時代のものとしては、北部九州や山陰地域での出土例はあるものの、その数は少なく、他の地域では極めて稀な鉄器といえます。また、平成20年度に出土した鉄器の中に釣針があることも明らかになりました。山陰地域では、近年多数の鉄器が出土する遺跡が確認されるようになっていますが、それらの中に鉄製釣針やヤス(あるいはモリ)などの漁具が確認される例が増加しており、鉄器の流通に海民集団の深い関与が想定されています。今回の調査で確認された希少な鉄製漁具は、山上に広がる本遺跡が、海との深い関わりをもっていることを物語るものであり、鉄器生産の背景にある広範なネットワークを有する海の民との深い関わりを想定させます。

## トレンチの位置と竪穴建物跡の位置



### トレンチ3 (2m×16m)

遺構や遺物が希薄な南尾根頂上から北東斜面にかけて設定した調査区です。斜面裾で大量の土器が出土しました。頂上部から斜面にかけては、ほとんど土器が出土しないことから、上方から捨てられたのではなく、尾根裾で使用された土器が、そのまま投棄されたものとみられます。

出土した土器の中には、イイダコ壺や製塩土器なども、海との関わりを示す土器もみられるほか、多数の鉄器も出土しました。出土した土器は、弥生時代終末期に製作されたものであり、舟木遺跡の存続期間の終わりの時期を示す土器群といえます。

イイダコ壺



## トレンチ5 (2m×10m)・トレンチ7 (2m×6m)

尾根の頂上部に設定したトレンチ5・7で、直径が約8mの竪穴建物跡1棟を検出しました。この建物跡からも小さな鉄器片が出土しており、鍛冶工房と考えられます。壁際の床面が中央部に比べて一段高くなっている高床部を持っており、その上で3か所の焼土面を検出しました。その内の一つは、一部が白色化し、その部分が硬化していることから高温の熱を受けている可能性が高く、鍛冶炉とみられます。南東壁際の幅約2mの範囲に炭や焼土が堆積している部分があり、その部分の間

壁溝(壁際の溝)が内側に曲がっている、これまでに例の無い構造であること、さらには、通常、あまり人が暮らすことのない尾根の頂上部に建てられた建物跡で、前年度の調査で発見した鍛冶工房を含む3棟の建物を見下ろす場所に位置していることから、これら工房建物群の中でも特別な役割を持った建物の可能性も想定されます。



炉跡



竪穴建物跡

(右写真の矢印が炉跡の位置)

## 鉄製漁具

### ・鉄製ヤス

全長約16.5cm、最大幅約1.4cmの棒状の鉄器で、X線撮影の結果、鋭く尖る先端と丁寧に研ぎ出した逆刺(かえし)が1箇所認められます。弥生時代のものとしては、近畿地方ではじめての発見となる貴重な鉄器です。トレンチ4から出土しました。



### ・鉄製釣針(平成28年度出土)

X線撮影の結果、釣針であることが確認されました。残存長(高さ)約2cmで、胴部からちもと部を欠いています。針先の内側には丁寧に研ぎ出した逆刺(かえし)がある単式の釣針です。

これらの鉄器は、その精巧さから舶来品の可能性が高い鉄器とも考えられます。



(X線撮影は愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター)

今月◎  
クローズアップ 舟木遺跡

広報淡路 2018年5月号 2018.5.5.

<https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/attachment/20384.PDF>

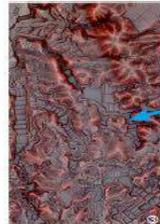
近畿初 鉄製ヤスが出土

～平成29年度 舟木遺跡の発掘調査成果を発表～

市教育委員会は、3月22日、平成29年度舟木遺跡発掘調査の成果を発表。魚を突く鉄製道具「ヤス」や新たな鉄器工所跡などが見つかりました。

弥生時代の鉄製ヤスの出土は近畿で初めてです。航海技術を持つ「海の民」によって、九州北部などからもたらされた可能性があります。

舟木遺跡は、淡路市舟木の山上（標高150より190）に広がる、弥生時代後期～終末期の集落遺跡です。平成27年度には中層部が出土し、平成28年度には鉄製ヤス（図1）や新たな鉄器工所跡（図2）などが明らかになりました。



①弥生時代の鉄製道具「ヤス」  
②鉄製の釣り針  
③三次元レーザー測量による赤色立体地図。矢印位置が調査場所。北側に遺跡が広がる可能性が出てきた。  
④堅穴建物跡。示している場所で伊が見つかった。  
⑤まとまって見つかった弥生土器

【出土した遺物】  
鉄製品106点などが出土  
弥生時代後期～終末期の集落遺跡である舟木遺跡は、平成27年度に中層部が出土し、平成28年度には鉄製ヤス（図1）や新たな鉄器工所跡（図2）などが明らかになりました。

【主な調査成果】  
遺跡が北に広がる可能性  
昨年度の調査結果と赤色立体地図から、現在確認される平坦面は弥生時代に堅穴建築物を建てるために造成された地形の痕跡であったことが確認されました。

【有識者のコメント】  
近畿初の鉄製ヤス、兵庫県で2例目の鉄製の釣り針を発見  
弥生時代の鉄製ヤスは、これまで数例見つかってはいますが、近畿地方では初めての出土です。鉄製の釣り針も、県下では香南市に次いで2例目と貴重です。

【調査者のコメント】  
舟木遺跡は、淡路市舟木の山上（標高150より190）に広がる、弥生時代後期～終末期の集落遺跡です。平成27年度には中層部が出土し、平成28年度には鉄製ヤス（図1）や新たな鉄器工所跡（図2）などが明らかになりました。

平成29年度 平成28年度と同じ丘陵部 前年度出土した3棟の堅穴住居を見下ろす頂上部で1棟の鍛冶炉のある大型堅穴住居が出土。また本年も104点の鉄器のほか土大量の土器や出土。其の中に鉄製ヤスも含まれていました。 わかに イイタコ壺や製塩土器もふくまれていました

<https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/attachment/20384.PDF>

舟木遺跡は、淡路市舟木の山上（標高150より190）に広がる、弥生時代後期～終末期の集落遺跡です。平成27年度には中層部が出土し、平成28年度には鉄製ヤス（図1）や新たな鉄器工所跡（図2）などが明らかになりました。

【主な調査成果】  
遺跡が北に広がる可能性  
昨年度の調査結果と赤色立体地図から、現在確認される平坦面は弥生時代に堅穴建築物を建てるために造成された地形の痕跡であったことが確認されました。

【有識者のコメント】  
近畿初の鉄製ヤス、兵庫県で2例目の鉄製の釣り針を発見  
弥生時代の鉄製ヤスは、これまで数例見つかってはいますが、近畿地方では初めての出土です。鉄製の釣り針も、県下では香南市に次いで2例目と貴重です。

【調査者のコメント】  
舟木遺跡は、淡路市舟木の山上（標高150より190）に広がる、弥生時代後期～終末期の集落遺跡です。平成27年度には中層部が出土し、平成28年度には鉄製ヤス（図1）や新たな鉄器工所跡（図2）などが明らかになりました。

国生み神話の淡路島が 卑弥呼の時代から古墳時代の日本の国造り謎を解き明かす?  
淡路島日本遺産 弥生後期から終末期

資料 津名丘陵の山間地集落群の中心集落 舟木遺跡 概要

\*\*\* 国生み淡路島の実像の書き写し・参考資料 by Mutsu Nakanishi \*\*\*\*

## ■ 和鉄の道・Iron Road by Mutsu Nakanishi

1. 卑弥呼の時代を解き明かす? 2018.3.23. 神戸新聞より  
淡路島弥生後期の大山間地集落群淡路市舟木遺跡 .  
弥生期の鉄製ヤスが出土 海の民や北部九州とのつながりを示す?  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018iron/18iron03.pdf>
2. 淡路島弥生時代の鉄器拠点「淡路市 舟木遺跡」鉄器の交易をなりわいか?  
近くの五斗長垣内遺跡を上回る新たな「弥生の鉄器拠点 国内最大級の鍛冶工房跡」が出土  
■htm : <http://www.infokkna.com/ironroad/2017htm/iron13/1702funaki00.htm>  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2017htm/2017iron/17iron01.pdf>
3. 大阪弥生文化博物館 2016 年春季特別展第 3 回考古学セミナー 2016. 5.28  
淡路市教委 伊藤宏幸氏講演「淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産」  
聴講 まとめ by Mutsu Nakanishi  
■htm : <http://www.infokkna.com/ironroad/2016htm/iron12/1607awaji00.htm>  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2016htm/2016iron/16iron07.pdf>
4. 淡路文化資料館 淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演資料 2015.12.12.  
「淡路島の弥生時代と山間地集落 五斗長垣内遺跡と舟木遺跡」  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2017htm/iron13/1702funakiR3awajiregime.pdf>
5. 弥生後期から卑弥呼の時代へ ベールを脱いだ「弥生の Iron Road 和鉄の道」  
淡路島 五斗長垣内遺跡の謎 シンポを聴講 して 2010.11.21.  
■htm : <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1012gossa00.htm>  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/2010iron/10iron14.pdf>
6. 弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権へ 国家形成の時代を動かした「鉄」  
2010 年秋 関西各地で開催された特別展とそのシンポジウム & 連続講演会 聴講まとめ  
無手勝流で 鉄をキーワードに 弥生から邪馬台国・大和王権への変遷を整理  
■htm : <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1012hmko00.htm>  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/2010iron/10iron13.pdf>
7. 淡路島 秋帆銅鐸は出雲と同じ鑄型の兄弟銅鐸 2016.10.14..  
国生神話の出雲・淡路は強い結びつき  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2016htm/2016iron/16iron14.pdf>

8. 「伊弉諾神宮 国生み神話の島」 淡路島で 大量の埋納銅鐸出土【1】 2015.5.20.  
大和の進出による新旧勢力交代による 国づくりの始まりを示すのか ???  
国譲り神話の出雲の大量の埋納銅鐸出土 (加茂岩倉・荒神谷遺跡) とそっくり  
■htm : <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/iron11/1506doutaku00.htm>  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/2015iron/15iron10.pdf>

9. 「伊弉諾神宮 国生み神話の島」 淡路島で大量の埋納銅鐸出土【2】 2015.7.1  
南淡路でみつかった埋納銅鐸 松帆銅鐸 (弥生時代前期末～中期前半)  
■PDF : <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/2015iron/15iron11.pdf>

## ■ インターネット他 参考資料

1. 概要資料 国生み神話の淡路島が 卑弥呼の時代から古墳時代の日本の国造り謎を解き明かす?  
淡路島日本遺産 弥生時代後期の山間地集落群の中心舟木遺跡 2018.8.25.  
◎ 淡路島北部 瀬戸内海を見晴らす古代の海人の郷 淡路市野島  
◎ 畿内に先駆けて鉄器文化を取り入れ、  
鉄器加工や製塩など生産工房群を展開した山間地集落群の中心 舟木遺跡  
■PDF <http://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018iron/18iron05.pdf>
2. 平成 28 年度 舟木遺跡の発掘調査成果について 淡路市教育委員会 2017.1.24.  
資料アレンジ整理しました  
■PDF : <http://www.hyogo-c.ed.jp/~board-bo/kisya28/2901/290125funaki.pdf>
3. 平成 29 年度 舟木遺跡の発掘調査成果について 淡路市教育委員会 2018.3.25.  
資料アレンジ整理しました  
■PDF : [https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/life/22931\\_51066\\_misc.pdf](https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/life/22931_51066_misc.pdf)
4. 広報淡路 2018年5月号 平成 29 年度 舟木遺跡の発掘調査 2018.5.5.  
近畿初の鉄製ヤスが出土  
■PDF : <https://www.city.awaji.lg.jp/uploaded/attachment/20384.PDF>